

8.16

読響サマーフェスティバル2014《三大交響曲》
〈土〉サントリーホール／14時開演

YNSO Summer Festival “Three Greatest Symphonies”
Saturday, 16th August, 14:00 / Suntory Hall

8.17

第73回みなとみらいホリデー名曲シリーズ
〈日〉横浜みなとみらいホール／14時開演

The 73rd Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series
Sunday, 17th August, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮 川瀬賢太郎 4ページ

Conductor KENTARO KAWASE

コンサートマスター ダニエル・ゲーデ
Concertmaster DANIEL GAEDE

シューベルト 交響曲 第7番 ロ短調 D759 〈未完成〉 [約25分] 8ページ

SCHUBERT / Symphony No. 7 in B minor, D759 “Unfinished”
I. Allegro moderato
II. Andante con moto

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉 [約31分] 9ページ

BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro
IV. Allegro

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] 10ページ

DVOŘÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 “From the New World”
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
【助成】文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）（8/17）
【協力】横浜みなとみらいホール（8/17）

8.20

読響サマーフェスティバル2014《三大協奏曲》
〈水〉サントリーホール／18時30分開演

YNSO Summer Festival “Three Greatest Concertos”
Wednesday, 20th August, 18:30 / Suntory Hall

指揮 円光寺雅彦 5ページ

Conductor MASAHIKO ENKOJI

ヴァイオリン 弓新 6ページ
Violin ARATA YUMI

チェロ 辻本 玲 6ページ
Cello REI TSUJIMOTO

ピアノ ニコライ・ホジャイノフ 7ページ
Piano NIKOLAY KHOZYAINOV

コンサートマスター ダニエル・ゲーデ
Concertmaster DANIEL GAEDE

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] 11ページ

MENDELSSOHN / Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato
II. Andante
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104 [約40分] 12ページ

DVOŘÁK / Cello Concerto in B minor, op. 104
I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Allegro moderato

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23 [約32分] 13ページ

TCHAIKOVSKY / Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23
I. Allegro non troppo e molto maestoso – Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

人気上昇中、新鋭指揮者の筆頭格
《三大交響曲》に期待の初登場

川瀬賢太郎

Kentaro Kawase

- ◇ 8月16日 読響サマーフェスティバル2014
《三大交響曲》
- ◇ 8月17日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©読響

1984年、東京生まれ。2007年、東京音楽大学を卒業。ピアノ及びスコアリーダーを島田玲子、指揮を広上淳一、汐澤安彦、チョン・ミョンフン、アーリル・レンメライトの各氏に師事。06年に行われた東京国際音楽コンクールで最高位（1位なしの2位）に入賞し一躍脚光を浴び、翌年の入賞者デビューコンサートで神奈川フィルと大阪センチュリー響（現・日本センチュリー響）を指揮し、鮮烈なデビューを飾った。

その後は東京響、日本フィル、九州響、札幌響、東京フィル、群馬響、名古屋フィルなど全国各地のオーケストラとの共演を重ね、12年には細川俊夫の〈班女〉広島公演（演出：平田オリザ）を指揮してオペラデビューを果たし、好評を博した。

海外においても08年と11年にイル・ド・フランス国立管と共演、また12年10月にはユナイテッド・インストゥルメンツ・オブ・ルシリンと細川俊夫のモノドラマ〈大鴉〉オランダ初演の指揮という大役を果たした。

07～09年、パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）アシスタント・コンダクターを務めた。現在は名古屋フィル指揮者（11年～）、神奈川フィル常任指揮者（14年～）を務めている。三重県いなべ市親善大使、八王子ユース弦楽アンサンブル音楽監督。

読響とは08年の《大田区民ホールアブリコ公演》で初共演、以後着実に共演の機会を重ねている。《サマーフェスティバル》には今回が初登場となる。

深い音楽性と的確なタクト
信頼を集める最高の職人芸

円光寺雅彦

Masahiko Enkoji

- ◇ 8月20日 読響サマーフェスティバル2014
《三大協奏曲》



©Kosaku Nakagawa-Nagoya Philharmonic

1954年、東京生まれ。桐朋学園大学指揮科にて指揮を齋藤秀雄、ピアノを井口愛子の両氏に師事。卒業後、ウィーン国立音楽大学へ留学し、オトマール・スウィーター氏に師事。帰国後は81年から86年まで東京フィル副指揮者を、86年から91年まで同フィル指揮者を務めた。89年には仙台フィル常任指揮者に就任。99年に退任するまで、オーケストラの飛躍的な発展に多大な功績を残した。98年から2001年までは札幌響正指揮者を務め、00年の東京公演などが高く評価された。11年からは名古屋フィル正指揮者を務めている。

客演指揮者としてもN響や大阪フィルなど、国内の各オーケストラと共演を重ね、着実に活動範囲を広げている。海外では92年にプラハ響の定期演奏会に客演したのを始め、94年にはBBCウェールズ響、95年にはドミトリー・キタエンコの招きによりノルウェーのベルゲン・フィル、98年にはフランスのブルターニュ管に客演し、その深い音楽性と的確な指揮で、各地の聴衆を魅了している。また、NHKの「名曲アルバム」や「おい、ニッポン」「あなたが主役 音楽のある街で」といった番組に定期的に出演するなど、幅広い活動を展開している。

読響とは、86年以降《名曲シリーズ》や親子向けコンサート、地方公演など、数多くのコンサートで共演を重ねており、夏恒例の《サマーフェスティバル》「三大交響曲」「三大協奏曲」では最多出演記録を保持している。また、近年は読売新聞社主催の《シネマ・ミーツ・シンフォニー》《ミュージカル・ミーツ・シンフォニー》公演でも活躍している。天皇、皇后両陛下のご臨席のもと、12年4月に行われた《第62回伊勢神宮式年遷宮奉祝演奏会》では、演奏後に両陛下から熱心な拍手を送られた。

名教師ブロンの下で腕を磨く若武者
期待高まる読響デビュー

弓 新

Violin
Arata Yumi



©Eiji Shinohara

1992年、東京生まれ。桐朋女子高等学校音楽科（男女共学）を経てチューリッヒ芸術大学に留学、ロームミュージックファンデーション奨学生、そして現在は江副育英会第41回奨学生としてザハール・ブロン教授のもとで学んでいる。全日本学生音楽コンクール東京大会小学生の部第1位を皮切りに、ノヴォシビルスク国際コンクール第1位、リピンスキー＝ヴィエニャフスキ国際コンクール第1位、ガダニーニ・ヴァイオリンコンクール第1位という輝かしいコンクール歴を誇る。2011年の第14回ヴィエニャフスキ国際コンクールでは、最年少ファイナリストに贈られる特別賞を受賞した。

国内ではこれまでに神奈川フィル、東京響、クラシカル・プレイヤーズ東京などと共演している。押鐘鈴子、上西玲子、辰巳明子、ザハール・ブロン、クリスティアン・テツラフの各氏に師事。読響とは今回が初共演。

◇ 8月20日 読響サマーフェスティバル2014《三大協奏曲》

自然体の演奏で人気を集める
新進気鋭のチェリスト

辻本 玲

Cello
Rei Tsujimoto



©Yuji Hori

1982年生まれ。東京藝術大学を首席で卒業後、シベリウス・アカデミー（フィンランド）、ベルン芸術大学（スイス）に留学。第72回日本音楽コンクール第2位（「聴衆賞」受賞）。2009年ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール第3位（日本人最高位）。サイトウ・キネン・オーケストラへの参加や、自ら率いるアトランティス弦楽四重奏団での活動など、オーケストラ、ソロ、室内楽のジャンルを問わず、今後の活躍が期待されている。

青山音楽賞新人賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。M.ワッツ、O.コール、川元適益、上村昇、山崎伸子、A.ノラス、A.メネセスの各氏に師事。使用楽器は、NPO法人イエロー・エンジェルより貸与されている1724年製アントニオ・ストラディヴァリウス。読響とは今回が初共演。

◇ 8月20日 読響サマーフェスティバル2014《三大協奏曲》

ピアノ王国ロシアが生んだ超新星
破格の才能で世界中を魅了する

ニコライ・ホジャイノフ

Piano
Nikolay Khozyainov



©Teruyuki Yoshimura

1992年、ロシア生まれ。5歳でピアノを始め、モスクワ音楽院中央特別学校を経て、現在はモスクワ音楽院に在籍している。10代前半から数々の国際コンクールを制覇し、2010年に行われた第16回ショパン国際ピアノ・コンクールでファイナリストとなり、一躍世界的な注目を集めた。その後も12年のダブリン国際ピアノ・コンクールで優勝を飾り、シドニー国際ピアノ・コンクールでは第2位および聴衆賞を受賞。

近年はロシアをはじめ世界各地のオーケストラと共演を重ねているほか、ニューヨークのカーネギーホールやロンドンのウィグモアホールなど、一流のコンサートホールでのリサイタルでも大成功を収めている。

読響とは今回が初共演。

◇ 8月20日 読響サマーフェスティバル2014《三大協奏曲》

プログラムノーツ PROGRAM NOTES		浅里公三 あさり こうそう・音楽学
読響サマーフェスティバル2014 《三大交響曲》 8.16 〈土〉	第73回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 8.17 〈日〉	

シューベルト
交響曲 第7番 ロ短調 D759 〈未完成〉

作曲:1822年/初演:1865年12月17日、ウィーン/演奏時間:約25分

ベートーヴェンが56歳で亡くなった翌年、同じウィーンでわずか31年の生涯を閉じたフランツ・シューベルト(1797~1828)も、音楽のあらゆるジャンルにすぐれた作品を残しました。しかし、その真価が広く知られるようになったのは死後のことです。また長い間、最後の交響曲ハ長調〈グレート〉が第9番、〈未完成〉が第8番とされてきましたが、近年になり、結局第7番はなく、〈未完成〉が第7番、〈グレート〉が第8番と改められました。とはいえ、傑作として親しまれているこの二つの交響曲を、シューベルトが聴く機会は一度もありませんでした。第8番は亡くなって11年後にシューマンが発見、1839年にメンデルスゾーンの指揮で初演されたことは有名です。未完成だった第7番はさ

らに長い間埋もれていて、1865年にウィーンの指揮者ヘルベックが発見、初演しました。聴衆はその美しさに完全に魅了され、それ以来〈未完成〉の名で世界中で愛されています。

ところで、シューベルトが交響曲第7番の作曲に着手したのは、スコアの日付から1822年10月30日と明らかでありながら、なぜ未完成のまま残したかは今も謎です。そして、その謎は、シューベルト特有の美しい旋律とロマン的な情感を豊かにたたえた傑作とともに、永遠のミステリーとして残るでしょう。

第1楽章 アレグロ・モデラート(少し速めに) ロ短調 3/4拍子 ソナタ形式

第2楽章 アンダンテ・コン・モート(落ち着いた速さで、動きをつけて) ホ長調 3/8拍子 ソナタ形式

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン
交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

作曲:1803~08年/初演:1808年12月22日、ウィーン/演奏時間:約31分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)がウィーンで最初の交響曲第1番を完成したのは1800年、30歳の時でした。しかし、間もなく耳の病が悪化し、一時は自殺を考えたほどでした。それを強^{きょうじん}かな精神力で克服した第3番〈英雄〉以後、交響曲だけでなく協奏曲、ピアノ・ソナタ、弦楽四重奏曲などに独創的な傑作を次々と作曲しました。1808年にウィーンで初演された交響曲第5番〈運命〉は、その頂点に立つ作品です。

「ダ・ダ・ダ・ダーン」という四つの音ではじまる有名な冒頭について、ベートーヴェンは弟子に「運命はこのように戸を叩く」と説明したといわれ、そのため日本では〈運命〉と呼ばれるようになったようです。実際、この四つの音は非常に重要で、主要なリズム動機として全曲を有機的に統一しています。この曲が古典的な形式による最も完璧な交響曲といわれるのもそのためです。ベートーヴェンの理念でもあった「苦悩を通して歓喜へ」を表現した作品でもあり、第3楽章から第4楽章を休みなく続けるという新

しい試みや、第4楽章では交響曲で初めてピッコロ、コントラファゴット、トロンボーンを用いるなど、音響的にも非常に画期的な作品だったのです。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ(快活に、生き生きと) ハ短調 2/4拍子 ソナタ形式

第2楽章 アンダンテ・コン・モート(落ち着いた速さで、動きをつけて) 変イ長調 3/8拍子 ソナタ形式による変奏曲

第3楽章 スケルツォ アレグロ(快活に) ハ短調 3/4拍子 3部形式

第4楽章 アレグロ(快活に) ハ長調 4/4拍子 ソナタ形式

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

作曲:1892〜93年／初演:1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間:約40分

チェコを代表する作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）の最後の交響曲となった第9番は、〈新世界から〉というタイトルが示すようにアメリカで作曲されました。1891年に生誕50年を祝う盛大な祝典がプラハで開催されるなど、すでに世界的な名声を獲得していたドヴォルザークは、92年から95年までニューヨークのナショナル音楽院の院長としてアメリカに滞在し、その間にチェロ協奏曲や弦楽四重奏曲第12番〈アメリカ〉などの傑作を作曲しています。この交響曲はその最初の作品で、93年にニューヨークで完成されました。

この交響曲を作曲中、ドヴォルザークは友人に「鼻のある人なら誰でもアメリカの影響をかぎとれるでしょう」と書いたように、〈家路〉として有名な第2楽章の主題をはじめ、旋律やリズムなどに新世界アメリカの先住民の音楽や黒人霊歌の特徴もたくみにとり入れられています。しかし、その5音音階や独特のシンコペーションのリズムなどは、彼が以前から研究していた東欧の民俗音楽に共通するものでした。この交響曲は新世界の

印象を音楽で表現したのですが、その根底に流れているのは、都会よりも自然を愛したドヴォルザークの故郷ボヘミアへの郷愁です。また、民俗音楽の特徴も古典的な形式や交響曲の様式に見事に昇華されている独創的な作品です。ニューヨークでホーム・シックにかかったドヴォルザークは、大好きな蒸気機関車を見に行ったそうですが、第4楽章のはじめの力強いダイナミックなリズムなどは、機関車からヒントを得たのではないかと思います。

第1楽章 アダージョ（ゆっくりと）〜アレグロ・モルト（とても速く、生き生きと） ホ短調 4/8拍子 ソナタ形式

第2楽章 ラルゴ（遅く） 変ニ長調 4/4拍子 3部形式

第3楽章 スケルツォ モルト・ヴィヴァーチェ（とても速く、生き生きと） ホ短調 3/4拍子

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ（快活に、情熱をこめて） ホ短調 4/4拍子 ソナタ形式

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦五部

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

寺西基之

てらにし もとゆき・音楽評論

読響サマーフェスティバル2014
《三大協奏曲》

8.20 〈水〉

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

作曲:1844年／初演:1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間:約26分

古今のヴァイオリン協奏曲の中でも特にポピュラーな人気を持つこの作品は、フェリックス・メンデルスゾーン（1809〜47）の後期の所産です。着想は1838年で、当時ライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者だった彼が、コンサートマスターのフェルディナント・ダーフィト（ダヴィット）のために作曲を思いついたのですが、本格的な作曲はかなり遅れ、完成は44年になりました。しかしその間にメンデルスゾーンの書法は一層深みを加え、またダーフィトの助言を多く得られたこともあって、完成された協奏曲は、確かな構成のうちに豊かなロマン性を湛^たえた、円熟期にふさわしい作となりました。初演は45年3月、ゲヴァントハウスにおいて、ダーフィトの独奏によって行われています。

全体は古典的な均整感を持っていますが、全楽章を連続させるなど、随所に独自の工夫がなされています。

第1楽章（アレグロ・モルト・アパッシオナート）にしても、伝統的な協奏的ソナタ形式をとらず冒頭から独奏が主題を奏し、またカデンツァを展開部の終わりに置くなど、新しいスタイルが試みられています。

第2楽章（アンダンテ）は3部形式の叙情美に満ちた緩徐楽章です。

第3楽章（アレグレット・ノン・トロppo〜アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ）は、序奏付きソナタ形式の快活で名技的なフィナーレです。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

作曲:1894～95年／初演:1896年3月19日、ロンドン／演奏時間:約40分

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）はボヘミア（チェコ）国民楽派の作曲家として知られています。1892年、すでに円熟期にあった彼は、ニューヨークのナショナル音楽院に院長として招かれ、新大陸に渡りました。このアメリカ時代の彼は、交響曲〈新世界から〉や弦楽四重奏曲〈アメリカ〉などの傑作を生み出していますが、これらは、アメリカ民俗音楽の影響とボヘミア民俗音楽の特質とを重ね合わせたような作風を示しています。遠く離れた母国ボヘミアへの望郷の念をそこに込めていたのかもしれません。

1894年晩秋から翌年2月にかけて作曲されたチェロ協奏曲は、アメリカ時代の最後に書かれた大作です。曲に着手する前の94年夏の休暇にボヘミアに一時帰郷したドヴォルザークは、母国への思いを一層募らせていました。そうした心情は、民俗的楽想に基づく激しい情熱表現と美しい叙情表現が交錯するこの協奏曲のうちに、はっきり示されていると言えるでしょう。そうした感情の表出の一方で、全体の論理的な構成、名技的な独奏の扱い、独奏と管弦楽との緊密な結び

付きには、円熟期の彼の確かな書法が見て取れます。

第1楽章（アレグロ）は劇的な起伏に満ちた協奏的ソナタ形式。^{ひそ}悲愴感を持つ第1主題は初めつづやくように出て、その後力強く繰り返されます。5音音階による第2主題（最初ホルンで示されます）はノスタルジックな気分を湛^{たた}えています。再現部では第2主題が先に現れ、最後に第1主題が再現されます。

第2楽章（アダージョ・マ・ノン・トロップ）は郷愁感と孤独感を持った緩徐楽章。中間部には自作の歌曲〈私に構わないで〉の旋律を用いていますが、この歌曲はドヴォルザークの昔の恋人ヨゼフィーナ（結局その妹が彼の妻となります）が好んでいたものです。

第3楽章（アレグロ・モデラート）は民俗的楽想を持つロンドで、技巧的なチェロと雄弁な管弦楽が起伏溢^{あふ}れる展開を繰り広げます。なお、一応の完成後、前述のヨゼフィーナが死去し、ドヴォルザークは彼女への追悼の思いを込めて現行のコードを書き足しました。そこには先の歌曲の旋律も取り入れられています。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

作曲:1874～75年／初演:1875年10月25日、ボストン／演奏時間:約32分

ドヴォルザークと同じ時代にロシアを代表する作曲家として活躍したピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）の作品の中でも、とりわけポピュラーなものの一つであるこのピアノ協奏曲第1番は、彼が作曲家として名声を高めつつあった1874年に着手されました。彼は、モスクワ音楽院長のニコライ・ルビンシテインに捧げるつもりでこの作品を書きました。しかし、ある程度作曲が進んだところでルビンシテインにその楽譜を見せたところ、彼は「価値のない演奏不能の作で、書き直しの必要がある」とその出来をこきおろします。怒ったチャイコフスキーは「1音も変えるつもりはない」と応酬し、結局そのままの形で翌75年2月に総譜を仕上げ、ドイツのピアニストのハンス・フォン・ビューロー（指揮者としても高名）に曲を送りました。作品を高く評価したビューローは、秋のアメリカ旅行にこれを携えボストンで初演、結果は大成功を収めます。ルビンシテインものちにこの作品の価値を認め、自ら演奏するようになり、チャイコフスキーの方も他人の意見を取り入

れて作品を改訂、最終的に現在演奏されるような形になりました。協奏曲の伝統様式を打ち破るようなラプソディックな性格を19世紀的な名技性と結び付け、さらに民俗色も強く打ち出した傑作です。

長大な規模の**第1楽章**は、壮麗な序奏（アレグロ・ノン・トロップ・エ・モルト・マエストーソ）に始まり、起伏ある発展を示す主部（アレグロ・コン・スピリート）が続きます。

第2楽章（アンダンティーノ・センブリチェ）は叙情的な緩徐楽章で、スケルツォ風の間部（プレスティッシモ）を挟みます。

第3楽章（アレグロ・コン・フォーコ）はウクライナ民謡に基づく主題を中心とする劇的なロンド・フィナーレです。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ